第168号

お茶の水女子大学学報

平成8年1月1日
お茶の水女子大学庶務課

目　次

◇関係法令 …… 2

◇学内規則 …… 2

○お茶の水女子大学放射線障害防止規程の一部を改正する規程 …… 2

○お茶の水女子大学ジェンダー研究センター（仮称）設備準備委員会要項 …… 2

◇学　事 …… 6

○平成8年度お茶の水女子大学学生募集要項（追加） …… 6

○平成8年度お茶の水女子大学大学院家政学研究科（修士課程）第2次学生募集要項 …… 10

○学位記授与式について …… 18

◇人　事 …… 19

◇諸　報 …… 25

○創立 120周年記念式典について …… 25

○永年勤続者表彰について …… 34

○奨学金授与式について …… 35

○研　修 …… 37

○海外渡航 …… 38

○レクリェーション行事 …… 41

○健康診断 …… 42

◇日　誌 …… 43

お茶の水女子大学
8, 2, 29

関係法令

【省　令】

○学校教育法施行規則の一部を改正する省令〔文部省令第２１号〕
（官報 7.12.26　第1800号）
「各教授会が、その議事運営方法として、教授会の定めるところにより代議員会等を置くことができること、及び教授会の定めるところにより、代議員会等の議決をもって教授会の議決とすることができることを制度上明らかにした。」

【告　示】

○平成８年度科学研究費補助金奨励研究（Ｂ）の計画調書の提出期間を定める件〔文部省告示第１３１号〕（官報 7.11.1 号外 209号）
○外国において学校教育における12年の課程を修了した者に準ずる者を指定する件の一部を改正する件〔文部省告示第１５０号〕
（官報 7.12.4 第1784号）

学内規則

○お茶の水女子大学放射線障害防止規程の一部を改正する規程
〔規則第17号〕
「本学放射線障害防止規程の見直しを行い、より一層の放射線障害の防止・安全管理の向上に資するため、次の事項を具体的に明示するための所要の整備を図ることとした。」
① 放射性物質等の取扱に従事する者及び安全管理に従事する者に関する組織を別図として設けた。
② 放射線取扱主任者の職務を明示した。
③ 各管理区域ごとに管理区域責任者を置くこととした。
④ 施設点検実施担当者を放射線取扱主任者及び放射線管理区域責任者で委員会の長が委嘱した者とすることとした。

○お茶の水女子大学ジェンダー研究センター（仮称）設置準備委員会要項
〔規則第18号〕
「平成８年度設置予定のジェンダー研究センター（仮称）を円滑かつ円満に発足させるための設置準備委員会を設置することとした。」

○平成７年お茶の水女子大学規則第17号

お茶の水女子大学放射線障害防止規程の一部を改正する規程を次のように定める。

平成　７年１２月１３日

お茶の水女子大学長　太　田　次　郎

お茶の水女子大学放射線障害防止規程の一部を改正する規程

お茶の水女子大学放射線障害防止規程（昭和57年６月14日全改）の一部を次のように改正する。

第２条の次に次の一条を加える。

（組織）

第２条の２　本学における放射性物質等の取扱いに従事する者及び安全管理に従事する者に関する組織は、別図のとおりとする。

第３条第３項を削り、同条の次に次の一条を加える。

（主任者の職務）

第３条の２　主任者は、次の各号に掲げる業務を行う。

(1)　放射線障害防止規程の制定及び改廃への参画

(2)　放射線障害防止上重要な計画作成への参画

(3)　法令に基づく申請、届出、報告の審査

(4)　立入検査等への立会い

(5)　異常及び事故の原因調査への参画

(6)　学長並びに部局長に対する意見の具申

(7)　使用状況等及び施設、帳簿、書類等の監査

(8)　関係者への助言、勧告及び指示

(9)　理学部ラジオアイソトープ実験室運営委員会の開催要求

(10)　その他放射線障害防止に関する必要事項

第７条第３項ただし書き中「見学等」を「見学及び施設点検等」に改め、同条の次に次の一条を加える。

（管理区域責任者）

第７条の２　前条の規定に基づく各管理区域ごとに管理区域責任者を置く。

２　管理区域責任者は、管理区域のある学科等に所属する教官をもつて充てる。

第８条の２第２項第３号中「又は委員会の長が承認した経験者」を「及び放射線管理区域責任者で委員会の長が委嘱した者」に改める。

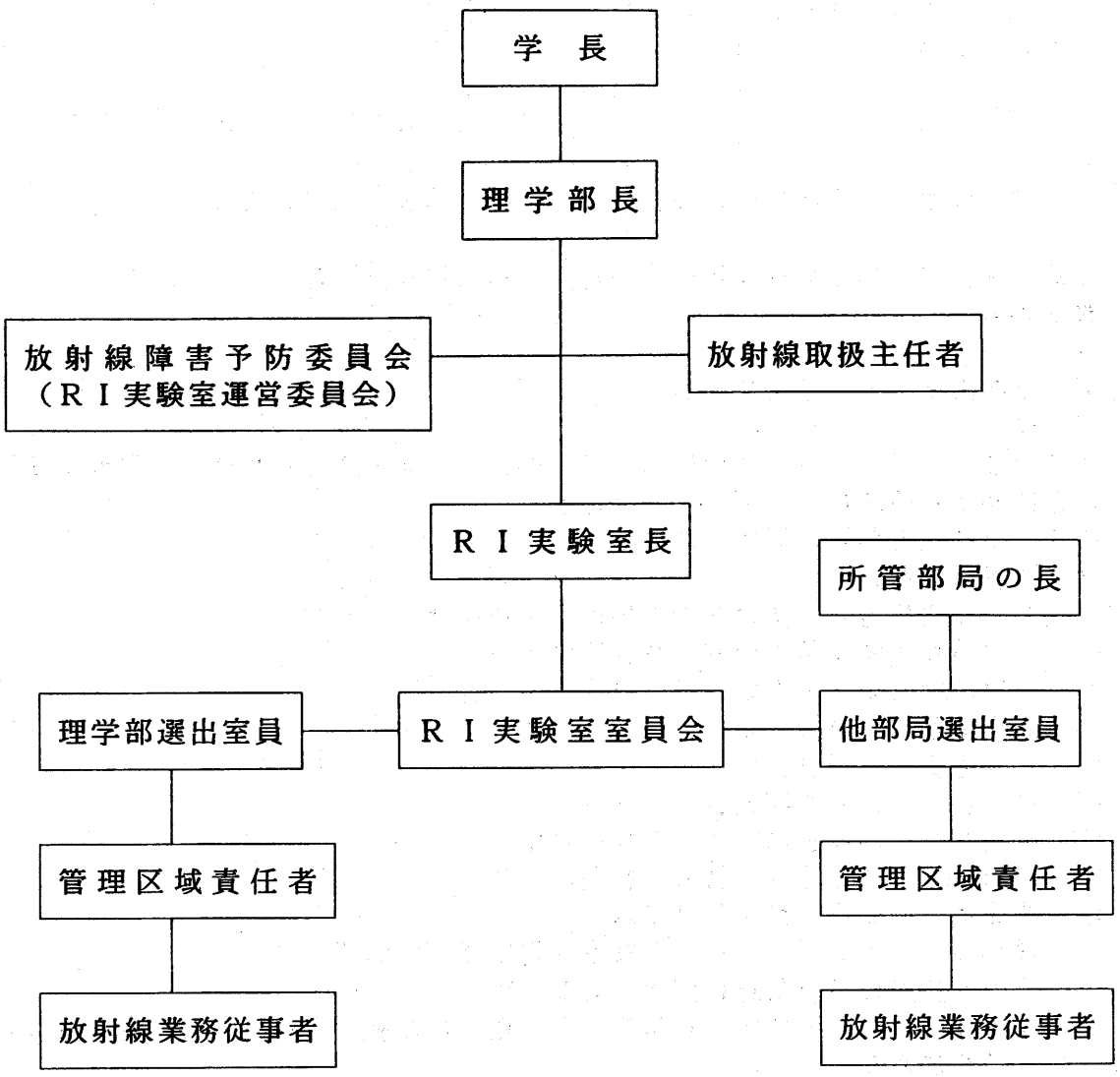
第９条第５項第１号中「不燃物及び可燃物に区分し、それぞれ」を削る。

別表の前に別図として次の図を加える。（次の図　別紙）

附　則

この規程は平成７年１２月１３日から施行する。

別図（第２条の２関係）



ＲＩ：ラジオアイソトープ

○平成７年お茶の水女子大学規則第18号

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター（仮称）設置準備委員会要項を次のとおり定める。

平成　７年１２月１３日

お茶の水女子大学長　太　田　次　郎

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター（仮称）設置準備委員会要項

（目的）

第１　お茶の水女子大学にジェンダー研究センター（仮称）（以下「センター」という。）の設置を円滑に行うため、ジェンダー研究センター（仮称）設置準備委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（審議事項）

第２　委員会は、次の事項を審議する。

一　管理運営の基本方針に関する事項

二　研究計画の基本方針に関する事項

三　センター長、その他教官人事に関する事項

四　その他運営に関する必要事項

（委員会）

第３　委員会は、女性文化研究センター運営委員会委員をもつて組織する。

２　委員長は、女性文化研究センター長をもつて充てる。

３　委員会は、必要と認めたときは、委員以外の者を出席させることができる。

４　事務局長は、第２第３号に掲げる事項については、審議に加わらないものとする。

（委員会の事務）

第４　委員会の事務は、庶務課において行う。

（雑則）

第５　その他委員会に必要な事項は、委員会において定める。

附　則

この要項は、平成８年度予算政府案決定日から実施し、センターが設置された時に廃止する。

〔政府案決定日　平成７年１２月２５日〕

学　　事

平成８年１月

平成８年度　学生募集要項（追加）

お茶の水女子大学

本学における学生募集については、既に発表した「平成８年度学生募集要項」のとおりですが、文教育学部では、平成８年度から既設の７学科３４講座を次のとおり４学科１３大講座に改組することを計画しています。

この計画は、関係法令の制定及び平成８年度予算成立により確定するもので現在は未確定ですが、確定したことによって生じる文教育学部の入学者選抜は改めて行わず、現行の募集区分ごとの入学者選抜で発表しているとおり実施します。

１　学科の改組が確定した場合は、次のとおり対応する改組後の学科に移行することとなる。

現行		改組後	
学科	講座	講座	学科
哲学科	哲学 倫理学 美学 社会学	形象分析学 哲学 比較歴史学 地理学	人文科学科
史学科	日本文化史 日本史学 東洋史学 西洋史学		
地理学科	人文地理学 自然地理学 地誌学		
国文学科	古典国文学 近代国文学 国語学	日本語・日本文学 中国語圏言語文化 英語圏・欧州言語文化 応用言語学	言語文化学科
外国文学科	中国文学 中国語学 英文学 米文学 英語学 独文学・独語学 仏文学・仏語学 言語学		
教育学科	教育学・教育史 教育社会学 教育行政 教育課程教育方法 社会教育学 教育心理学 発達心理学 認知心理学	応用社会学 教育科学 心理学	人間社会科学科
舞踊教育学科	舞踊教育学 遊戯学 動作学 音楽学 演奏学	舞踊教育学 音楽表現	芸術・表現行動学科

2　文教育学部の学科改組計画の概要

(1)　改組の目的

１８才人口の減少、高学歴化・高年齢化社会の到来に伴う生涯教育の観念の浸透、国際化・高度情報化の急速な進行、学生のニーズの多用化、これらの状況に際している本学部の担うべき役割と課題は一層大きなものがある。しかし、本学部の体制では、この課題に十分に対処出来ない。また、人文諸科学研究の今日的な流動状況に即応するためには、従来本学部がとってきた研究体制では、不十分である。

このため、従来の７学科５専攻の区分を改めて４学科とし専門別に細分化されていた従来の３４の小講座を１３の大講座に再編することによって、学生がこれまでより広い範囲から自らの学習プランに応じた履修を行う事が出来るよう、広い視野のもとで教育・研究の活性化を図り、同時に国際化、高度情報化、高年齢化社会の到来が要求する課題への対応を図る。また、教官がこれまでの狭い専門分野を越えて隣接する専門分野と交流できるよう、広い視野のもとで教育・研究の活性化を図り、同時に国際化、高度情報化、高年齢化社会の到来が要求する課題への対応を図る。

(2)　学科・講座の概要

人文科学科

様々な社会や文化にみられる相違や共通点を把握するために必要な基礎的な思考力を養成し、画像を含む幅広い資料に基づく実証的分析、時間的、空間的な総合的分析を通じ、人間の活動の本質を多角的に追求する。

講　座	講　座　の　概　要
形象分析学	建築・絵画・彫刻・工芸をはじめ、古文書・古地図・地図情報・気象情報などの画像資料について、人文科学の幅広い視野からの総合的な分析を通じ事物の本質を把握する。
哲学	真、善、美をめぐる様々な問題を、哲学・倫理学・美術史の視点から多角的に取り扱う。そのために、哲学的な思考力を養成し、倫理観の探究や倫理思想史の研究、造形美術の実証的研究等に重点を置いた教育を行う。
比較歴史学	様々な社会や民族の違いを理解し合い共存していくために必要な歴史的な見方を研究する。従来の歴史学の方法に加えて比較の視点を重視し、分りやすくアプローチする。
地理学	実在の地域に展開する人文・社会現象あるいは、その基盤である自然現象に着目し、実地の環境調査・村落調査などにより入手する一次資料に基づく実証的教育・研究を行う。

言語文化学科

人間の言語活動とそれに基づく文化現象を総合的に把握することを目指す。特に、日、中、英、仏、独のそれぞれの言語と文学及び言語文化とを、個別的に、あるいは、比較対象的に教育し研究する。

講　　座	講　　座　　の　　概　　要
日本語・日本文学	日本の古典文学、近現代文学及び日本語に関して、他地域の文学や他言語と関連しつつ、幅広く、かつ深く教育・研究を行う。
中国語圏言語文化	中国古典文学、中国現代文学及び中国語を中心にして、中国、台湾、香港など広く中国語圏地域の言語と文化の教育・研究を行う。
英語圏・欧州言語文化	英語、仏語及び独語の教育・研究を柱とし、それぞれの言語が地域性と関連しつつ育んできた言語文化の諸相及び各言語文化の相互関係を教育・研究する。
応用言語学	英語圏・欧州言語文化講座と連携を図りながら言語の理論面のみならずその応用面、特に母国語以外の第二言語の習得と運用の在り方について教育・研究を行う。

人間社会科学科

人間の行動メカニズム、社会構造と人間の関わり、人間の発達過程に、マクロ（社会構造）とミクロ（心理・生理）の両面から科学的方法論をもって接近し、総合的な人間理解を目指す。学校、家族、職場等における諸問題の科学的分析と解決を目指した教育・研究を行う。

講　　座	講　　座　　の　　概　　要
応用社会学	人間の社会的行為や現代社会の諸問題を、社会構造やその変動との関連において、理論的かつ実証的に解明し、更にそれを実際の問題解決の場面に応用できるような教育・研究を行う。
教育科学	人間の生涯にわたる発達の過程に、多様な科学的方法論によってアプローチし、生涯学習社会における教育・発達問題の解決に寄与できる専門的人材の育成を目指す。
心理学	人間行動の科学的・総合的な理解を教育・研究の目標にしており、社会・教育・発達・臨床・認知の各領域を基礎から応用まで体系的に学ぶ。

芸術・表現行動学科

舞踊・スポーツ、音楽の芸術・表現行動を総合科学的に捉えることによって多様な文化を理解し、併せて理論と実践を統合して現実に応用できる教育・研究を行う。

講　　座	講　　座　　の　　概　　要
舞踊教育学	舞踊並びにスポーツ等の身体表現行動を理論と実践の両面から総合科学的に解明し、現実社会に応用できるような教育・研究を行う。
音楽表現	芸術・表現行動を音楽表現の理論と実践両面から捉えることにより、現代の多様な文化を理解し、メディアの発達した社会生活と密接に関連した教育・研究を行う。

3　平成８年度文教育学部学生募集の取扱い

(1)　学科の改組が確定した場合は、次のとおり対応する改組後の学科に移行することとなる。

現行					改組後		
学科		入学定員	募集人員	推薦入学	学科	入学定員	推薦入学
哲学科		24	24		人文科学科	63	(5)
史学科		23	23				
地理学科		22	17	5			
国文学科		35	27	8	言語文化学科	92	(12)
外国文学科	中国文学・中国語学	12	8	4			
	英文学・英語学	37	37				
	仏文学・仏語学	8	8		人間社会科学科	46	
教育学科	教育学	23	23				
	心理学	17	17				
舞踊教育学科	舞踊教育学	18	18		芸術・表現行動学科	31	
	音楽教育学	13	13				
計		232	215	17	計	232	(17)

注　(　)は内数で示す。

4　文教育学部の入学者選抜方法等

(1)　選抜方法

学科改組に伴う入学者選抜は、改めて行うものでなく、現行の募集区分ごとの入学者選抜で既に発表しているとおり実施します。

(2)　出願方法

入学願書は、現行の募集区分ごとに受け付けます。ただし、現行の哲学科志願者は、改組後の志望学科として「人文科学科」又は「人間社会科学科」のいずれかを、入学願書の専攻欄に記入すること。（第二志望を哲学科とした者も同じ。）

(3)　合格発表

合格者の発表は、現行の募集区分ごとに行いますが、改組が確定した場合は、改組後の区分も併せて発表します。

(4)　万一、関係法令の成立、予算の成立がない場合は、志願した現行の募集区分で受け入れます。

5　その他

この学科改組について、不明の点がありましたら、下記に照会してください。

東京都文京区大塚２丁目１番１号
お茶の水女子大学　文教育学部事務部　TEL　(03)5978－5162～3
入学主幹室入学試験係　TEL　(03)5978－5151～2

平成８年度　お茶の水女子大学大学院家政学研究科（修士課程）
第２次学生募集要項

１．専攻名及び募集人員

専　　攻　　名	募集人員
児童学専攻	若干名
食物学専攻	若干名
被服学専攻	若干名
家庭経営学専攻	若干名

２．修業年限　　２年

３．出願資格　　下記に該当する女子とする。

（１）　大学を卒業した者及び平成８年３月卒業見込の者

（２）　外国において学校教育における１６年の課程を修了した者

（３）　文部大臣の指定した者（昭和２８年文部省告示第５号）

（４）　本学の大学院において大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者

４．選考方法　　入学者の選考は、筆記試験、口述試験及び調査書等を総合して決定する。

５．出願手続

（１）　入学願書・写真票及び受験票（用紙は本学所定のもの）

（２）　卒業証明書又は卒業見込証明書（本学出身者は不要）

（３）　推　薦　書　　指導教官又は主任教官等により作成されたもの（形式随意、用紙はB5版縦長横書とする。）（本学出身者は不要）

（４）　調　査　書　　用紙は本学所定のもの

（５）　健康診断書　　用紙は本学所定のもの

（６）　写　　真　　正面上半身の名刺型（4.5 ｃｍ×5.5 ｃｍ）で出願前３か月以内に撮影したもの２枚。（写真票及び受験票に貼付）

（７）　受験許可書　　在職中の者は所属長の許可書を添えること。

（８）　入学検定料　　２８，０００円

上記出願書類を一括し、検定料を添えて所定の期日までに本学に提出すること。

※郵送（締切日までの消印有効）により出願する際は、書留速達とし、「大学院家政学研究科入学願書在中」と朱書すること。

なお、検定料（郵便為替とし、受取人欄に「お茶の水女子大学」とだけ記入）と受験票返送用封筒（あて先を表記し、80円切手を貼付）を同封すること。

6．出願期間・選考期日・願書受付場所

区分 専攻名	出願期間	選考期日
児童学専攻 食物学専攻 被服学専攻 家庭経営学専攻	平成8年 1月5日（金） ～ 1月11日（木）	平成8年 2月1日（木）

（1） 受付時間　平日　午前9時～午前11時30分　午後1時～午後3時

（2） 受付場所　〒112 東京都文京区大塚2丁目1番1号　電話(03)5978-5722

本学生活科学部事務部　電話(03)5978-5723

（都バス大塚2丁目又は地下鉄茗荷谷あるいは護国寺下車）

7．試験時間及び試験場所

（1） 筆記試験・口述試験

専攻名	筆記試験			口述試験 14:40 ～
	第一外国語 9 :30 ～10:45	第二外国語 10:45～11:30	専門科目 12:30～14:30	
児童学専攻	英語 Ⅰ	英語 Ⅱ	発達臨床学 （発達・臨床・障害・保育・人間関係等）	専攻（学士論文のある者は学士論文を含む）について行う。

ア．児童学専攻志願者は、①大学院における研究計画書（2、000字程度）及び②口述試験面接票を出願の際提出すること。

専攻名	筆記試験		口述試験 15:40 ～
	外国語 10:00~ 11:30	専門科目 12:30 ～ 15:30	
食物学専攻	英語	1)一般化学 2)栄養学・食品学・食品貯蔵学・調理学	専攻（学士論文のある者は学士論文を含む）について行う。

専攻名		筆記試験			口述試験
		第一外国語 9:30~10:30	※第二外国語 10:45 ~11:30	専門科目 12:30～15:30	15:40~
被服学専攻	被服材料学 被服整理学	英語	英語	1)一般化学（有機・無機・物理化学） 2)被服材料学（繊維化学を含む）・ 被服整理学（染色化学を含む）	専攻（学士論文のある者は学士論文を含む）について行う。
	被服構成学		英語	1)被服構成学 2)被服環境学	
	被服美学		英語，独語，仏語の内一	1)服飾美学 2)服飾史（日本・西洋） 3)論文	
	流行情報論		英語，独語，仏語の内一	1)流行情報論 2)服飾史（日本・西洋） 3)論文	

ア．※第二外国語の受験に際しては辞書を携行して差支えない。

イ．被服学専攻志願者は、選択科目名を入学願書及び写真票に記入すること。

専攻名	筆記試験			口述試験
	第一外国語 9:30~10:30	第二外国語 10:45 ~11:30	専門科目 12:30～15:30	15:40~
家庭経営学専攻	英語Ⅰ （英文和訳）	英語Ⅱ （和文英訳）	家政学原論 家庭経済学 家族関係学	専攻（学士論文のある者は学士論文を含む）について行う。

ア．英語Ⅱの受験に際しては辞書を携行して差支えない。

イ．家庭経営学専攻志願者は、①大学院における研究計画及び②卒業研究要旨又はこれにかわるものをそれぞれB5版・400字・横書原稿用紙 2枚にまとめて出願の際提出すること。

（2） 試験場所　　お茶の水女子大学（東京都文京区大塚２丁目１番１号）

8．入学料及び授業料

入学料　270,000円

授業料（年間）　447,600円

9．合格者発表

合格した者には平成8年2月8日（木）午後、生活科学部掲示板に掲示するとともに、合格通知書を送付する。

10．健康診断

健康診断は健康診断書による。この診断書による検査の結果、本学において更に必要と認めた者に対しては精密検査を行う。

11．注意事項

（1）　出願書類等の請求又は照会のあて先はすべて本学「生活科学部事務部」とし、返信用封筒（あて先を表記し２７０円切手を貼付）を同封すること。

（2）　出願手続後の書類変更や検定料の払い戻しは行わない。

（3）　合格、不合格に関する問い合わせには一切応じない。

（4）　外国人留学生に関しては、出願書類等が異なるため本学の学生部学務課留学生係が取り扱うので、同係に問い合わせること。

お茶の水女子大学　〒１１２　東京都文京区大塚２丁目１番１号
生活科学部事務部　電話：(03)5987－5722
(03)5987－5723

お茶の水女子大学大学院家政学研究科修士課程概要

1．目的及び使命

本学大学院は、本学の目的に則り、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて、文化の進展に寄与することを目的とする。

2．専攻及び学生定員

家政学研究科に次の専攻をおき、学生定員は次のとおりとする。

専　攻　名	入学定員	総 定 員
児童学専攻	8	16
食物学専攻	10	20
被服学専攻	8	16
家庭経営学専攻	6	12
計	32	64

3．授業科目履修方法及び課程の修了

（1）　学生は2年以上在学し、それぞれの専攻課程の授業科目について30単位以上履修ししなければならない。

ただし、専攻課程担当の指導教官が当該学生の研究上特に必要と認めた場合に限り、指導教官の指定する他の専攻課程・他研究科及び学部の授業科目を履修して、これを修士課程の単位とすることができる。

（2）　課程の修了には、2年以上在学し所要の単位を修得し、かつ学位論文を提出して最終試験に合格しなければならない。

4．学位授与

本研究科において、課程を修了した者に対しては、修士の学位を授与する。

5．専攻別授業科目・担当教官

専攻	授業科目名	担当教官	授業科目名	担当教官
児童学専攻	人間関係学特論	教授 黒田淑子	児童学特別講義	教授 原ひろ子
	児童心理学特論	教授 無藤隆	児童発達学特論	講師 柴坂寿子
	臨床心理学特論	教授 飯長喜一郎	児童学研究特論	講師 （兼任）
	保育学特論	講師 田代和美	人間環境学特論	〃 〃
	発達臨床学特論	〃 〃	児童臨床学特論	〃 〃
	発達神経学特論	教授 水野悌一	児童保健学特論	〃 〃
	障害臨床学特論	講師 山本政人	児童社会特論	〃 〃
	児童福祉特論	助教授 杉田孝夫	集団理論特論	〃 〃
	児童学特別研究	全専任教官	児童臨床特別実習	〃 〃
食物学専攻	栄養化学特論Ⅰ	教授 荒川信彦	生物化学特論第Ⅱ	教授 倉田忠男
	栄養化学特論Ⅱ	助教授 大塚惠	環境生化学特論	教授 大橋昌子
	食品化学特論Ⅰ	教授 小林彰夫	食品微生物学特論	助教授 冨永典子
	食品化学特論Ⅱ	助教授 久保田紀久枝	食物学特別研究	全専任教官
	食品貯蔵学特論Ⅰ	教授 本間清一	栄養生理学特論	講師 （兼任）
	食品貯蔵学特論Ⅱ	助教授 村田容常	特殊栄養学特論	〃 〃
	調理学特論Ⅰ	教授 島田淳子	食品物性特論	〃 〃
	調理学特論Ⅱ	助教授 畑江敬子	食物学特別講義	〃 〃
	生物化学特論第Ⅰ	教授 五十嵐脩		
被服学専攻	被服材料学特論	教授 小川昭二郎	服飾史特論Ⅰ	助教授 吉村佳子
	被服材料化学特論	〃 〃	服飾史特論Ⅱ	〃 〃
	生活材料学特論	助教授 仲西正	流行情報特論	教授 板倉寿郎
	生活材料化学特論	〃 〃	情報設計特論	〃 〃
	被服整理学特論		被服学輪講	全専任教官
	染色化学特論	教授 駒城素子	被服学特別研究	〃
	洗浄科学特論	〃 〃	被服物理学特論	講師 （兼任）
	繊維界面化学	助教授 會川義寛	高分子科学特論	〃 〃
	被服環境学特論	教授 田中辰明	繊維構造論	〃 〃
	被服構成学特論Ⅰ	助教授 長谷部ヤエ	被服衛生学特論	〃 〃
	被服構成学特論Ⅲ	〃 〃	繊維界面化学	〃 〃
	被服構成学特論Ⅱ	助教授 田辺新一	応用界面化学	〃 〃
	被服構成学特論Ⅳ	〃 〃	被服構成学特論Ⅴ	〃 〃
	服飾美学特論Ⅰ	教授 小池三枝	被服構成学特論Ⅵ	〃 〃
	服飾美学特論Ⅲ	〃 〃	芸術学特論	〃 〃
	服飾美学特論Ⅱ	助教授 徳井淑子	被服学特別講義	〃 〃
	服飾美学特論Ⅳ	〃 〃		
家庭経営学専攻	家政学原論特論Ⅰ	教授 富田守	家庭科教育特論Ⅰ	助教授 牧野カツコ
	家政学原論特論Ⅱ	助教授 松浦秀治	家庭科教育特論Ⅱ	〃 〃
	生活史特論	〃 〃	女性学特論Ⅰ	教授 原ひろ子
	生活行動論特論	教授 水野悌一	女性学特論Ⅱ	助教授 舘かおる
	家庭管理学特論Ⅰ	教授 富田守	人間行動学特論Ⅰ	講師 柴坂寿子
	家庭管理学特論Ⅱ	助教授 鈴木恵美子	人間行動学特論Ⅱ	〃 〃
	人間生体学特論	〃 〃	家族思想史特論	助教授 杉田孝夫
	労働経済学特論	教授 篠塚英子	生活社会科学特論Ⅰ	〃 〃
	生活経済学特論	助教授 御船美智子	家庭経営学特別研究	全専任教官
	消費者経済学特論	助教授 犬塚伝也	生活社会科学特論Ⅱ	講師 （兼任）
	家族社会学特論	教授 袖井孝子	消費者行動論	〃 〃
	比較家族研究特論	〃 〃	家族関係学特論	〃 〃
	家庭法律学特論	教授 利谷信義	居住学特論	〃 〃

家政学研究科（修士課程）各専攻の研究概要

1．児童学専攻

担当教官	主な研究分野
教授　水野悌一	多動や学習障害の早期診断と治療
教授　黒田淑子	人間関係・生活臨床の諸問題への心理劇的アプローチ
教授　飯長喜一郎	カウンセリングの過程
教授　無藤　隆	子どもの生活における学習と発達および対人関係
助教授　杉田孝夫	家族思想・児童福祉思想の比較思想史的研究
講師　山本政人	コミュニケーションの発達と障害
講師　田代和美	乳幼児の保育と臨床

2．食物学専攻

担当教官	主な研究分野
教授　荒川信彦	ビタミンC関連物質の栄養生化学及びその代謝制御機構
教授　小林彰夫	食品香気成分の化学的分析および合成を含む構造決定
教授　島田淳子	食品の調理機構の解明および嗜好性の客観評価
教授　本間清一	食品の加工貯蔵中の成分間反応と着色等の品質形成との関係
教授　五十嵐脩	脂溶性ビタミン、必須脂肪酸の生理活性機構の解明
教授　大橋昌子	生体内オリゴ糖鎖の構造と生理活性の解明
教授　倉田忠男	アスコルビン酸及びその関連物質反応性と構造の解析
助教授　久保田紀久枝	食品中の香気およびその機能性に関与する成分の化学
助教授　畑江敬子	調理による食品の化学的、物理的、感覚的変化とその制御
助教授　大塚　惠	微量栄養素の生理効果および代謝制御
助教授　村田容常	食品中の生物活性物質及び成分間反応の化学・生化学
助教授　冨永典子	極限環境下の微細藻類の生理・生化学

3．被服学専攻

担当教官	主な研究分野
教授　小池三枝	日本近世・近代の服飾と美意識
教授　板倉寿郎	流行情報伝達の構造解明
教授　田中辰明	繊維製造時に必要な空気調和工学の理論
教授　小川昭二郎	被服材料及び有機機能性材料の化学
教授　駒城素子	高分子ビルダーの物性と洗浄機構の解明
助教授　長谷部ヤエ	着衣による生理的影響と熱的快適性
助教授　徳井淑子	フランス服飾史を対象とした服飾表現論
助教授　仲西　正	高分子を中心とした生活材料の機能発現機構の解明
助教授　田辺新一	衣住環境の人体的側面からの評価
助教授　會川義寛	体表よりの物理的刺激と人体の応答
助教授　吉村佳子	日本中世の服飾と美意識

4．家庭経営学専攻

担当教官	主な研究分野
教授　富田　守	家政学の学問論および生活行動の生理学的研究
教授　袖井孝子	高齢化社会および個人の加齢に関する研究
教授　利谷信義	家族法の基本問題（氏、離婚、扶養、相続など）の研究
教授　篠塚英子	労働者の行動を労働経済学の手法で研究
教授　原ひろ子	諸文化に於ける人間の一生のジェンダー分析と女性政策の研究
助教授　犬塚伝也	消費者・生活者の視点からの経済学的研究
助教授　牧野カツコ	家庭科教育における教育内容および教育方法の研究
助教授　鈴木恵美子	人の健康に関する生化学的研究、人体の生化学
助教授　松浦秀治	人類の生活史、ヒトの由来と進化およびその編年
助教授　御船美智子	家族の経済生活と家計の構造研究
助教授　舘かおる	ジェンダー規範と制度に関する研究
講師　柴坂寿子	人間の対人行動の観察研究

○学位記授与式について

（論文提出によるもの）

授与番号	博士の専攻分野の名称	授与年月日	氏名	本籍	論文題名
乙第45号	博士（学術）	平成７年12月12日	香西みどり	石川県	野菜の加熱による硬化・軟化の速度論的解析と硬さの定式化
乙第46号	博士（人文科学）	平成７年12月12日	黄育馥	中国	CHINESE GENDER RELATIONS AS SEEN THROUGH *QIAO* IN PEKING OPERA(1902-1937)（京劇における蹺の存廃から中国の両性関係を見る(1902-1937)）
乙第47号	博士（人文科学）	平成７年12月12日	佐藤マサ子	東京都	カール・フローレンツの日本研究

人　　事

発令年月日	氏　名	異動内容	異動区分	異動前の所属・官職
7．11．1	河村哲也	教授（理学部） 併任期間 8.3.31 まで	併　任	（千葉大学教授）
7．12．1	安田次郎	教授（文教育学部）	昇　任	助教授（文教育学部）
7．12．4	馬場由子	附属小学校教諭 期間 8．1.14まで	臨時的任用	

◎非常勤職員

発令年月日	氏　名	異動内容	異動区分	任　期	備　考
7. 11. 1	坂本　久観予	事務補佐員 （施設課）	採　用	8. 3.31	
〃	長谷川　恵子	ﾃｨｰﾁﾝｸﾞ・ｱｼｽﾀﾝﾄ （文教育学部）	〃	8. 2.29	
〃	品田妙子	〃	〃	〃	
〃	松田英子	〃	〃	〃	
〃	河野彰子	〃	〃	〃	
〃	杉山　登喜子	〃	〃	〃	
〃	松浦恵津子	ﾃｨｰﾁﾝｸﾞ・ｱｼｽﾀﾝﾄ （大学院人文科学研究科）	〃	〃	
7. 11. 6	春田美好	ﾃｨｰﾁﾝｸﾞ・ｱｼｽﾀﾝﾄ （生活科学部）	〃	8. 3.31	
〃	金岡宏子	〃	〃	〃	
〃	米山直子	〃	〃	〃	
〃	長谷川　廣子	〃	〃	〃	
〃	片岡千乃	〃	〃	〃	
〃	峠　聡子	〃	〃	〃	
〃	鉢野ゆき	〃	〃	〃	
〃	大村聡美	〃	〃	〃	
〃	清水　まゆみ	〃	〃	〃	
7. 11. 15	小林　恵	ﾃｨｰﾁﾝｸﾞ・ｱｼｽﾀﾝﾄ （文教育学部）	〃	8. 2.29	
〃	清野　歩	〃	〃	〃	
〃	横山広美	〃	〃	〃	

発令年月日	氏　名	異動内容	異動区分	任　期	備　考
7. 12. 1	八田陽子	事務補佐員 （文教育学部）	採　用	8. 3.31	
〃	大鷲寿代	ﾃｨｰﾁﾝｸﾞ･ｱｼｽﾀﾝﾄ （理学部）	〃	8. 2.29	
〃	町田　菜津美	〃	〃	〃	
〃	中村弥生	〃	〃	〃	
〃	影山美央	〃	〃	〃	
〃	松井麻依	〃	〃	〃	
〃	奥村幸枝	〃	〃	〃	
〃	森　澄子	〃	〃	〃	
〃	松本真希	〃	〃	〃	
〃	北原　美奈子	〃	〃	〃	
〃	門吉朋子	〃	〃	〃	
〃	小原寿子	〃	〃	〃	
〃	篠原浩美	〃	〃	〃	
〃	工藤かおり	〃	〃	〃	
〃	加藤澄恵	〃	〃	〃	
〃	足立桐子	〃	〃	〃	
〃	東　友紀子	〃	〃	〃	
〃	藤原　泉	〃	〃	〃	
〃	中村友子	〃	〃	〃	

発令年月日	氏　　名	異　動　内　容	異動区分	任　　期	備　　考
7．12．1	岡野桃子	ﾃｨｰﾁﾝｸﾞ･ｱｼｽﾀﾝﾄ（理学部）	採　　用	8．2.29	
〃	沓掛　磨也子	〃	〃	〃	
〃	伊澤智美	〃	〃	〃	
〃	石澤藤子	〃	〃	〃	
〃	森田礼子	〃	〃	〃	
〃	平澤智美	〃	〃	〃	
〃	丸山知子	〃	〃	〃	
〃	坂田聡子	〃	〃	〃	
〃	奥嶋明希	〃	〃	〃	
〃	駒ケ嶺何千子	教務補佐員（生活科学部）	辞　　職		
7．12．8	品田妙子	ﾃｨｰﾁﾝｸﾞ･ｱｼｽﾀﾝﾄ（文教育学部）	〃		

◎非常勤講師

発令年月日	氏　名	異動内容	異動区分	任　期	備　考
7. 11. 1	小泉武栄	講師（文教育学部）	併　任	8. 3.31	東京学芸大学教授
〃	高木亮一	講師（理学部）	〃	〃	千葉大学教授
〃	高木　伸	〃	〃	〃	東北大学助教授
〃	松本　元	〃	〃	〃	工業技術院電子技術総合研究所首席研究官
〃	村田好正	〃	〃	〃	東京大学教授
〃	上村慎治	〃	〃	〃	東京大学助教授
〃	井川洋二	〃	〃	〃	東京医科歯科大学教授
〃	元屋　清一郎	〃	採　用	〃	東京理科大学教授
〃	勝又紘一	〃	〃	〃	理化学研究所主任研究員
〃	吉沢　篤	〃	〃	〃	(株)ジャパンエナジー商品開発研究所主任研究員
〃	田島暢夫	〃	〃	〃	
〃	長尾憲治	〃	〃	〃	
〃	笠原道弘	〃	〃	〃	帝京大学教授
〃	河崎行繁	〃	〃	〃	三菱化学生命科学研究所主任研究員
〃	岩津玲磨	〃	〃	〃	(株)大林組技術研究所研究員
〃	松山容子	講師（家政学部）	〃	〃	大妻女子大学教授
〃	岩田秀行	〃	〃	〃	跡見学園女子大学教授
7. 11. 6	岡田　美也子	講師（附属中学校）	〃	7.11.30	
7. 11. 14	堀　淳世	講師（附属小学校）	〃	7.12.19	
7. 11. 30	手嶋久三	講師（理学部）	辞　職		

発令年月日	氏　名	異動内容	異動区分	任　期	備　考
7. 12. 1	天野知香	講師（文教育学部）	採　用	8. 3.31	
〃	奥村　剛	講師（理学部）	併　任	〃	岡崎国立共同研究機構助手
〃	柳田　勉	〃	〃	〃	東京大学教授
〃	真行寺千佳子	〃	〃	〃	東京大学助教授
〃	山田安定	〃	採　用	〃	
〃	西尾静恵	〃	〃	〃	
〃	伊藤正時	〃	〃	〃	慶応義塾大学教授
〃	奥薗　透	〃	〃	〃	
〃	鳥越隆士	講師（生活科学部）	併　任	〃	國立身体障害者リハビリテーションセンター学院教官
〃	山本　譲	〃	採　用	〃	
〃	永井和夫	講師（家政学部）	併　任	〃	東京工業大学教授
〃	西村敏英	〃	〃	〃	広島大学助教授
〃	脊山洋右	〃	〃	〃	東京大学教授
〃	森　謙治	〃	採　用	〃	東京理科大学教授
〃	飯渕貞明	〃	〃	〃	和洋女子大学教授
〃	大村　平	〃	〃	〃	
〃	池田充宏	〃	〃	〃	㈳産業健康振興協会専務理事
7. 12. 16	渡辺　伸	講師（附属高等学校）	併　任	〃	信州大学助教授
〃	三篠俊彦	〃	〃	〃	信州大学助教授
7. 12. 31	本間裕子	講師（理学部）	辞　職		

諸　　報

○ 創立120周年記念事業の実施について

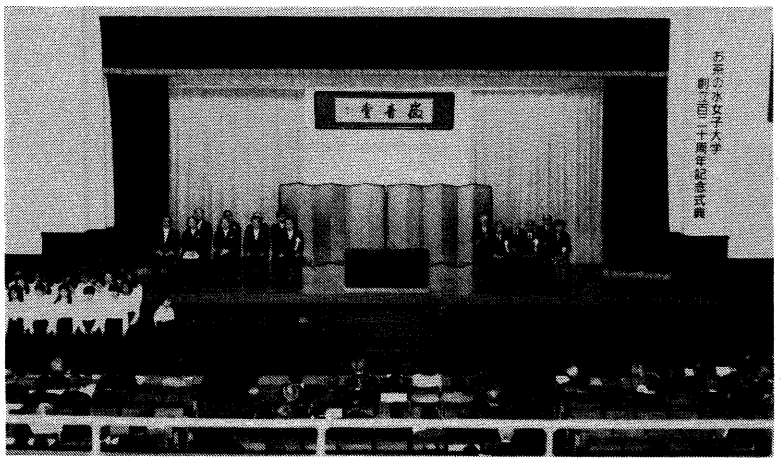
本学は、明治８年（1875年）に我が国初の女子教育者養成機関である東京女子師範学校として創立以来、平成７年（1955年）11月で創立 120周年を迎え、これを記念して各種の記念事業が実施された。

平成７年11月８日（水）午前11時より徽音堂において挙行された記念式典には、野崎弘文部事務次官をはじめとして、文部省関係者、近郊国立大学関係者、私立女子大学学長、本学名誉教授及び桜蔭会会員等約 370名の方々の出席を得て、本学文教育学部舞踊教育学科音楽教育学の合唱団と全出席者による校歌「みがかずば」の斉唱により開会された。

式典は太田次郎本学学長の、「 120年という２度目の還暦の年に当たり、少人数のきめ細かい教育と質の高い個性的な研究を行う大学として、従来の伝統の上にさらに飛躍を期す。」との式辞の後、「創立以来女子高等教育の向上に力を注ぎ、幾多の優秀な人材を排出し、社会の発展興隆に貢献をしてきた本学が、今後も今日の大学に対する国民の期待や社会的要請に的確にこたえ、ますます教育研究の実を挙げることを期待する。」との島村宜伸文部大臣祝辞が野崎弘文部事務次官により代読され、さらに、田村俶奈良女子大学長より奈良女高師の卒業生である日本画家小倉遊亀画伯の著作「百歳の書」のタイトル『悠々燦々』のことばを引用されて「今後とも悠然かつ燦然と発展願いたい。」との、並びに膳恵子桜蔭会会長より「「泰山は土壌を譲らず、故によくその大を成す」とのことばのとおり、伝統を守り人材を育ててきたことが、今日の本学を在らしめ、その本学が国内外を問わず21世紀に向けて更なる発展を願う。」との祝辞が述べられ、祝電披露に続き学生歌の合唱をもって記念式典を終了した。

記念式典に引き続き大学体育館において開催された祝賀会は、太田次郎学長、野崎弘文部事務次官及び市古宙三元本学学長の挨拶の後、山本信東京女子大学長の乾杯の発声によりはじまり、本学の今昔や恩師、級友との昔話に時のたつのも忘れ、和やかな雰囲気のうちに午後１時45分閉会した。

なお、当日より10日までの３日間にわたり文教育学部１号館会議室において東京女子師範学校第１回からの卒業アルバムや初代摂理中村正直ゆかりの品等、創立以来 120年にわたる貴重な資料の展示会が開催され、延べ約 500名前後の入場者があった。



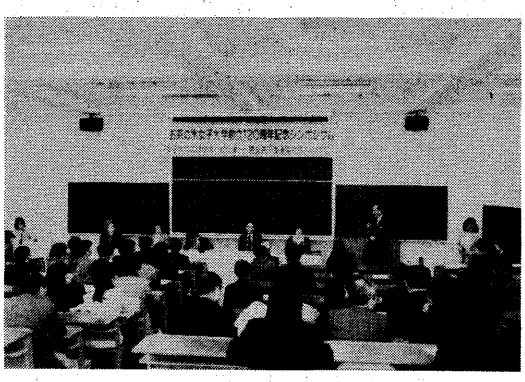
また、8日の式典終了後、共通講義棟2号館において、大口勇次郎附属図書館長を中心に作成された資料ビデオ『お茶の水女子大学の 120年　－女子高等教育の軌跡Ⅰ－（東京女子高等師範学校篇）』が上映された。

さらに、11月11日（土）14時より理学部3号館大講義室において、「女子大学の理想像・期待像　－男女共同参画型社会に向けて－」と題するシンポジウムが開催された。パネリストとして学外より蟻川芳子日本女子大学理学部教授及び北條文緒東京女子大学現代文化学部教授、本学より島田淳子生活科学部教授、土屋賢二文教育学部教授及び藤原正彦理学部教授の参加を得て、原ひろ子女性文化研究センター教授の司会により 100名を超える参加者と伴に、男女が対等に参画し、共に責任を担う新しい社会の実現には未だ多くの課題があるなかで、女子大学の果たす役割について、2時間を超える熱心な討論が行われ、森隆夫人間文化研究科長の「このシンポジウムで我々の意識が少しでも変わって、明日への女子大の道が開けることを期待しています。」との挨拶により、盛会のうちに終了した。

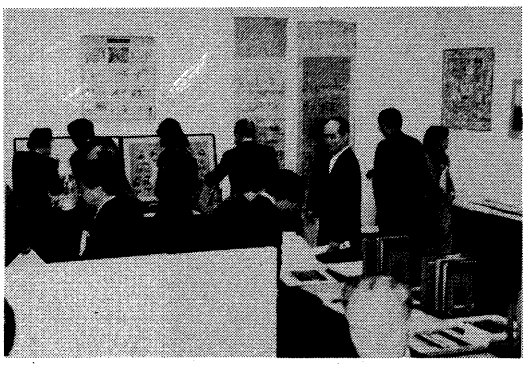
なお、本シンポジウムについては、討論の内容、関係者の女子大学に関する意見等をまとめた報告書を作成し、公表することとしている。

本学創立 120周年記念事業を実施するに際して、学内外の多くの皆様からいただいたご支援、ご協力に対して、本誌上をお借りいたしまして深く御礼申し上げます。

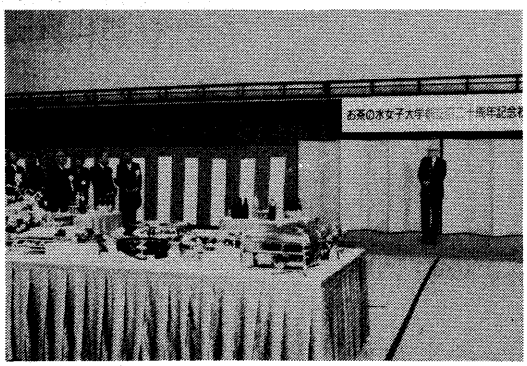
また、これを機にお茶の水女子大学創立 120周年記念事業後援会を組織し、本学の教育研究の振興のためご支援をいただいております桜蔭会の皆様はじめ後援会の皆様に対しましても心から御礼申し上げます。



シンポジウム会場



展示会場



祝賀会場

学 長 式 辞

本日創立 120周年記念式典を開催致しましたところ、文部事務次官始め文部省関係の皆様、各学長先生方、多くのご来賓の方々、桜蔭会の皆様、本学関係方々、学生諸君、計 370名をこえる方々がご参加下さり盛大な式典を行えますことを、心から有難く存じ、厚く御礼申し上げます。

本学の歩みをたどってみますと、明治８年11月29日、「御茶の水」の地に、東京女子師範学校が開校致しましたのが、本学の始まりでございます。その後、東京師範学校女子部を経まして、明治22年、女子高等師範学校となり、同41年奈良女子高等師範学校の設置に伴って、東京女子高等師範学校と改称致しました。大正12年の関東大震災で校舎が消失致し、昭和７年現在の大塚の地に移転致しました。昭和24年に「お茶の水女子大学」となり、翌年には文教・理・家政の３学部をもつ小規模ながら総合的な大学となりました。昭和38年度から全国の国立の新制大学に先がけて大学院修士課程の家政学・理学・人文科学の研究科が次々と設置され、昭和51年に、これも新制大学としては初の独立の大学院博士課程人間文化研究科が設けられました。現在は、文教・理・生活科学の３学部、先ほど申上げました修士課程の３研究科、及び博士課程の人間文化研究科のほかに、女性文化・生活環境の２研究センターより成る大学となっております。また、女子師範学校以来、附属幼稚園・小学校・中学校・高等学校の４附属校園が設置されております。大学の教官数は約 220名、職員数は約 115名でございます。

このような本学の歴史の中で、多数の卒業生を送り出しております。前身の女子師範・女子高等師範学校の時代は、わが国の女子教育の中心となる人々を養成することが、第一の目的となっておりました。そして、卒業生の多くは、全国の中等教育の教壇に立ち、教育に従事しました。わが国の女子教育の発展は、女高師の卒業生の努力が元になっていると申しても過言ではないと思います。

また、当時ほとんどの大学は女子に門戸を開いておりませんでしたので、女子師範および女子高等師範は、わが国の女子の最高学府として位置づけられておりました。したがって、卒業生は、教育以外に、学問・研究など多く専門分野でも活躍致しております。

わが国女医の第1号は、女子師範学校卒業生の荻野ぎんさんでありますし、またわが国で女性として初めて博士の学位を受けられましたのも、後に本学の教授・名誉教授となられました保井コノ先生であります。当時の方々は、女性なるが故の多くの障壁や困難をのりこえられ、刻苦勉強されて、学問及び他の道をきわめられました。

この真摯な伝統は、お茶の水女子大学にも受けつがれ、大学の卒業生も今日社会の各方面の女子の指導的役割を果たしております。

この度、120周年に当りまして、この良き伝統をいかし明日へ向けていくつかの記念事業を計画致しました。本日の記念式の他に、開学以来伝わっております貴重な資料の記念展示も行っております。また、11日には、「女子大学の未来を探る」公開のシンポジウムを予定しております。さらに、本学にとって今後の大きな課題となります国際協力に関してその資金の募金と、展示しました資料を保存する資料室の建設を目指して、募金活動も計画しております。

120 年というのは、人間にたとえますと、2度目の還暦に当ります。還暦によって、再び生まれたえとに帰り人間は再出発致します。

本学もまた、今年を期に改めて新しい第1歩を歩み出したいと思います。少人数のきめの細かい教育と質の高い個性的な研究を行う大学として、従来の伝統の上にさらに飛躍を期しております。

御来会の皆様方の今後の御助力と御鞭撻をお願い致しまして、ご挨拶と致します。

有難うございました。

平成7年11月8日

お茶の水女子大学長　太　田　次　郎

文部大臣祝辞

本日、ここに、お茶の水女子大学創立 120周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

お茶の水女子大学は、明治8年に設置された東京女子師範学校を淵源とし、その後、幾度かの変遷を経て、昭和24年に新制大学として新たに発足し、充実した教育研究を展開しつつ、今日に至っております。

この間、一貫して女子高等教育の向上に力を注ぎ、幾多の優秀な人材を輩出され、我が国社会の発展興隆に多大な貢献をしてこられました。

このような優れた伝統を有する本学が創立 120周年を迎えられますことは、誠に喜ばしいことであり、歴代の学長、学部長をはじめ関係各位の長年にわたる御努力に、深く敬意を表する次第であります。

近年、大学をはじめとする高等教育の在り方について、各般の改革が求められており、我が国が世界の第一線に伍してさらに発展・充実していくためには、各大学が、不断に点検・評価を行いつつ、特に、教育面の充実を図り、特色ある、生き生きした大学づくりに努めていくことが強く要請されております。

現在、本学におかれても、様々な工夫をこらした大学改革を進められておりますが、このような大学改革は一朝一夕にして実施されるものではなく、関係者のたゆみない努力の積み重ねによって可能となるものであります。

今後も、伝統や旧来の評価に甘んじることなく、今日の大学に対する国民の期待や社会的要請に的確にこたえ、ますます教育研究の実を挙げられますよう、一層の御精進、御尽力を期待するものであります。

終わりに、御臨席の各界各位におかれましても、これを契機に、本学に対し、より一層の温かい御指導と御協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、本学のさらなる御発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

平成7年11月8日

文部大臣　　島村宜伸

奈良女子大学長祝辞

このたび、お茶の水女子大学創立 120周年記念式典の開催にあたり、お祝いの言葉を述べさせていただくことになりました。誠に嬉しく光栄に存じます。

皆さんもご存じのとおり、明治８年11月、東京女子師範学校の発足以来、 120年の長きにわたり、お茶の水女子大学は、我が国の女子教育のメッカ、女子高等教育の輝かしい先駆者でありました。たとえば、古くは明治９年、附属幼稚園が設置されますが、これは、我が国における幼稚園の第一号。又、明治15年には附属高等女学校が設置されますが、これは、我が国の高等女学校の第一号でありました。

それらの附属校園はもちろん、それらを束ねる東京女子師範学校が中心となって、すでに明治10年代までに、貴学は師範教育の礎を築きあげたのであります。貴学のこの輝かしい金字塔は永遠不滅であり、そのゆるぎなき存在感は、全ての人の認める所であります。

さて、明治41年、関西は奈良の地に女子高等師範学校が設置されます。それに伴って、貴学の前身、女子高等師範学校は名称を改め、東京女子高等師範学校として、さらに発展を続けました。以来、80有余年、東京女高師と奈良女高師は姉妹校の契りを結ぶことになります。姉と妹というより、母と娘ほどの年の差がある関係かもしれません。それはともかく、両者の、切っても切れない関係が強化されるのは、第２次大戦直後でありましょう。

昭和20年代初め、連合国総司令部は我が国の高等教育の再編成を企てて、「一つの県に一つの大学」という方針を出します。そり動きのなかで、女高師は大学昇格の運動を展開しました。ＣＩＥの教育顧問イールズ女史は、

YES,　EAST　TOKYO

WEST　NARA

と述べ、この二つの女高師の存在意義を高く評価して、それぞれが単独に、国立女子大学に昇格することになり、今日に至っているのであります。

しかしながら、戦後50年の今日は激動と変革の時代であり、女子大学の在り方もまた様々に論じられています。学内でも、その検討は続けられています。その意味で、この120周年記念事業の一環として、男女共同参画型社会の実現を目指し女子大学の理想像を求めるシンポジウムが開催されますことは、極めて意味のあることと考えます。

最後になりましたが、奈良女高師の古い卒業生、日本画家の小倉遊亀先生は本年百歳。先生の最近のご本「百寿の書」のタイトルは、『悠々燦々』であります。

お茶の水女子大学は今年 120歳、貴学にこの「悠々燦々」ということばをお贈りして、お祝いの言葉といたします。今後とも悠然かつ燦然と発展を続けて下さい。本日はおめでとうございました。

平成７年11月８日

奈良女子大学長　田　村　　俶

桜蔭会会長祝辞

本日はまことにおめでとうございます。

今日この盛典に多数の卒業生をお招きくださいました母校に心から厚く御礼申し上げます。

此の度の百二十周年の記念日を学長先生はダブル還暦と表現なさいましたが、これは大変名言であると存じます。

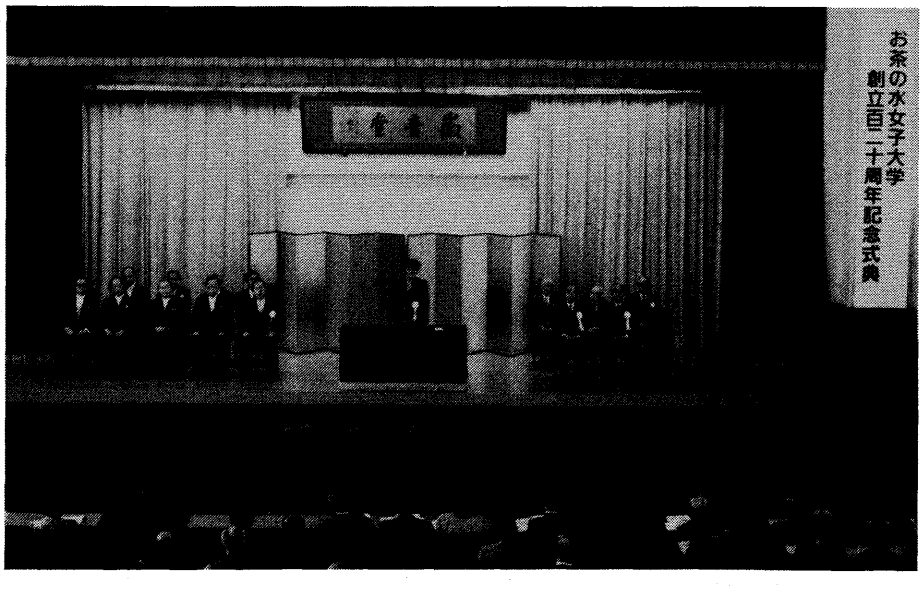
思えば本学は東京女子高等師範学校とお茶の水女子大学という二つの異なった歴史を持ちながら今日一体をなしております。

創立は明治八年それは日本に学制がしかれた三年後のことです。寺子屋に変って小学校が作られましたが、就学率は極めて低く、特に女子の場合は十パーセントにもみたないものでした。時の政府はこの事態を改善するひとつの方法として我が国の女子教育の基礎を作る女子教育者養成機関として本学を誕生させたのです。東京女子高等師範学校は立派にこの役割を果たし日本の教育界に大きな力を持ち、「天下の女高師」と評されました。

こうして女子高等師範学校が女子の最高の教育機関だったからでございましょうか、創立当時は三年に一度皇后陛下がおこしになり、女子の学ぶ姿を大変興味深くごらんになったとのことでございます。

昭和二十四年創立七十五周年の祝典がこの講堂で行われましたが、皇后陛下をお迎えして盛大に行われました祝典のことを在校生だった私は忘れることが出来ません。

創立当時から向学心にもえて集った生徒の中には、更に深く学びたいものも少なくありませんでしたが進むべき大学がないという嘆きも又大きいものでした。女性に門戸を開いていた東北大学や、しばらくおくれて門戸を開いた東京文理科大学に進み、なかには母校の歴史にのこる業績をあげられた方々もございます。創立当時の卒業生の中には荻野吟さんのように、日本の女医の第一号になられた方もございます。全く独学でそれぞれの道を開いた人も少なくありません。これらの輝かしい業績の蔭で教員としての本分に精魂こめてきたというのが一般の多くの会員でございます。



お茶の水女子大学
創立百二十周年記念式典

母校のこうした伝統を受け継いで、東京女子高等師範学校は戦後の学制改革により、お茶の水女子大学に昇格いたしました。

広範な社会領域に対応する女性を教育することが課題になったからです。当時在校生だった私は、単に女子の教育大学への昇格ではなく女子の総合大学への昇格のために、日夜多くの署名を集め国会に陳情に行った日のことをなつかしく思い出します。

それからはや四十六年、お茶の水女子大学は女高師七十四年の卒業生の数をはるかにしのぐに至りました。大学院も設置され、その他の研究機関も充実されて、後進の若い方々が過去にあったような嘆きを繰り返すことはもうありません。

かつて女高師のあったところは、現在医科歯科大学になっております。そこには今なお創立当時からの榎がそびえ立ち、一角には「女子教育発祥の地」の石碑が立っております。

関東大震災後に移りました大塚の地も今は立派な学園としての風格をそなえました。

榎がいちょうに変わりましても、母校と卒業生を結ぶ心は、お茶の水女子大学の伝統として永遠に変ることはないと信ずるものでございます。

私共の大学は女子の大学として大きいとはいえないかもしれません。しかしその果しつつある役割は、あるいは果してきた役割は掛け値なしに大きいものがございます。

「泰山は土壌を譲らず　故によくその大を成す」という言葉があります。泰山は標高一五二四メートルでそれほど高くはありませんが中国を代表する山として知られています。この泰山はわずかひとにぎりの土さえもおろそかにしないからこそ雄大な山容を保っているのだといわれます。私共の大学も同じことで伝統を守り人材を育ててきたからこそ今日があるのだと考えます。

お茶の水女子大学の名が一女子大学の名にとどまることなく、国の内外をとわず、二十一世紀にむけて更なる発展を心から願ってやみません。

まことにつたない言葉でございますが過去百二十年の歩みを顧み、ますます発展される母校の弥栄をお祝い申し上げます。

終りに母校の先生方はじめ学生の方々のご多幸をお祈り申し上げます。

平成７年11月８日

桜蔭会会長　　膳　恵子

○永年勤続者表彰について

平成７年度永年勤続者表彰式が平成７年11月22日大学会議室で行われ、被表彰者には、表彰状並びに記念品が授与されました。

被表彰者は次のとおりです。

学長表彰者

人文科学研究科	三木紀人
生活科学部	飯長喜一郎
〃	袖井孝子
附属小学校	遠藤修一郎
〃	若林富男
附属中学校	田中美也子
〃	坂下英喜
附属高等学校	室岡和彦
学生課	平松周二

文部大臣表彰者

施設課	太田原武

○奨学金授与式について

平成７年度奨学金授与式が11月21日（火）大学会議室（生活科学部本館２階）で行われた。

奨学金受奨者

＊被服学奨学金受奨者（１名）

第54号　木　村　美智子

研究題目「洗浄におけるビルダーの再汚染防止作用」

＊食物学奨学金受奨者（１名）

第53号　笠　原　光　子

研究題目「葉菜類の鮮度に関する研究」

＊家庭経営学奨学金受奨者（２名）

第39号　柚　木　理　子

研究題目「ドイツ社会における『自由時間』と家庭生活に関する研究」

第40号　藤　田　純　子

研究題目「イスラーム社会における人口問題と家庭」

＊人間文化研究科奨学金受奨者（５名）

第16号　佐　藤　秀　美

研究題目「放射伝熱による食品の加熱に関する基礎的研究」

－熱源の放射特性と食品の仕上がり状態の関係－

第17号　西　村　美　加

研究題目「サーマルマネキンを用いた椅座位時の着衣熱抵抗に関する研究」

第18号　金　　仙　珉

研究題目「調理過程におけるニンニク特有香気成分の安定性及び抗酸化性」

第19号　早　川　文　代

研究題目「油脂の関与する感覚用語の体系化と実験的検証」

－“あぶらっこい”を中心として－

第20号　根　本　信　乃

研究題目「細胞増殖の制御および加齢変化におけるアスコルビン酸の栄養学的基礎研究」

＊池田摩耶子記念奨学金受奨者（４名）

第30号　耿　　春　梅

研究題目「中国における共産主義青年団の成立とその事業」

第31号　孟　　祥　鳳

研究題目「辛亥革命前後における孫文と日本」

第32号　陳　　鵬

研究題目「植物細胞の低温耐性獲得機構に関する研究」

第33号　尹　　素　英

研究題目「転換期朝鮮の対外認識と対外政策」

＊池田重記念奨学金受奨者（１名）

第７号　金　　美　玉

研究題目「食品・生体系におけるＬ－アスコルビン酸の自動酸化機構に関する基礎研究」

＊平成７年度外国人留学生奨学助成金受奨者（３名）

朴　　美　京（韓国）

金　　敢　蕾（中国）

ｲﾌﾞﾗｲﾑ・ﾘｽﾞﾜﾝｸﾞﾙ（中国）

○研修

名　　称	実施日時	対象者	修了者	主　催
平成7年度大学図書館講習会	平成7年 11月13日～ 11月16日	大学等の図書館において、2年以上の経験を有する35歳以下の中堅職員	附属図書館・総務係 篠原　千亜紀	文部省及び東京大学附属図書館
第62回関東地区中堅係員研修	平成7年 12月4日～ 12月8日	ア　国家公務員採用Ⅲ種試験により採用され採用後おおむね8年の経験年数を有する者及び国家公務員採用Ⅱ種試験により採用され、採用後おおむね3年の経験を有する者並びにこれらと同等とみとめられる者 イ　本年度4月1日現在30歳未満の者 ウ　勤務成績が優秀な者	会計課・出納係 村石　昌昭	人事院関東事務局
平成7年人事事務研修	平成7年 12月6日～ 12月14日	ア　人事事務を3年以上担当している主任又は一般職員 イ　行政職（Ⅰ）2級以上の者 ウ　原則として年齢25歳以上35歳以下の者で、この研修未受講者 エ　勤務成績が優秀な者	庶務課・職員係 和田　東子 庶務課・人事係 山本　直之	文　部　省

○海外渡航

所属・職名	氏名	渡航先国	渡航目的	期間	渡航種目
文教育学部・教授	小川　剛	中華人民共和国	国際協力基金による客員教授派遣事業による講義・研究指導	7. 8.25～7.10.22	外国出張
人間文化研究科・助手	西野由希子	台湾	「明治期における日中文化人の交流の調査と位置づけ」に係わる資材の調査・収集及び研究打合せ	7.11. 3～7.11.6	外国出張
附属中学校・教諭	花田修一	アメリカ合衆国 スペイン ドイツ連邦共和国 他	平成7年度文部省国立大学・学部附属学校等教官海外派遣研修	7.11. 6～7.11.30	外国出張
生活環境研究センター・教授	大橋昌子	ドイツ連邦共和国	文部省在外研究	7.11.20～8.2.18（帰国予定）	外国出張
学生部・留学生係長	鎌田啓子	中華人民共和国	日本留学生フェア参加	7.11.30～7.12. 4	外国出張
理学部・助教授	出口哲生	大韓民国	日韓科学共同研究「低次元の場の量子論とその応用」打合せ	7.12. 2～7.12. 9	外国出張
文教育学部・教授	大口勇次郎	連合王国	在英日本史料の所在と現状に関する調査	7.12. 2～7.12.16	外国出張
理学部・教授	長嶋雲兵	アメリカ合衆国	スーパーコンピューティング'95出席と打合せ	7.12.4～7.12.14	外国出張
理学部・助教授	小木曽啓示	連合王国	ウォーリック大学で行われる代数幾何学シンポジウム（コンファレンスon 3-folds）に参加・講演	7.12.8～8. 1. 8（帰国予定）	外国出張
生活科学部・助教授	田辺新一	大韓民国	伝統的技術の現代建物への適用に関する日韓合同コロキウムへの参加・講演	7.12.16～7.12.19	外国出張
生活環境研究センター・教授	倉田忠男	アメリカ合衆国	環太平洋国際化学会出席、講演及び資料収集	7.12.16～7.12.24	外国出張
理学部・助教授	鷹野景子	アメリカ合衆国	環太平洋国際化学会議(PACIFICHEM'95)にて研究発表	7.12.17～7.12.23	外国出張

所属・職名	氏名	渡航先国	渡航目的	期間	渡航種目
生活科学部・教授	小林彰夫	アメリカ合衆国	環太平洋国際化学会議出席	7.12.20～7.12.24	外国出張
生活科学部・教授	袖井孝子	中華人民共和国	第6回アジア社会学会出席・報告及び「東アジアの少子化と高齢化対策」研究プロジェクト打合せ	7.11. 1～7.11. 9	海外研修
文教育学部・教授	内藤俊史	アメリカ合衆国	北米道徳教育学会第21回大会発表	7.11.15～7.11.20	海外研修
付属中学校・教諭	坂下英喜	アメリカ合衆国	在留邦人に対する日本や海外子女・帰国子女教育についての講演	7.11.16～7.11.25	海外研修
理学部・助教授	今野美智子	タイ王国	「第2回アジア結晶学連合会議」に出席・発表するため	7.11.21～7.11.25	海外研修
文教育学部・教授	湊和夫	アメリカ合衆国	東西センター30周年記念集会での発表及び資料収集	7.12. 1～7.12. 7	海外研修
理学部・講師	最上善広	アメリカ合衆国	第6回環太平洋宇宙会議への出席・論文発表	7.12. 5～7.12.10	海外研修
文教育学部・助教授	栗原尚子	スペイン	「バルセロナ市の都市計画」「スペインにおける近代地理学の受容」研究	7.12.10～8. 9.27（帰国予定）	海外研修
文教育学部・助教授	熊谷圭知	インドネシア共和国 シンガポール共和国	近年の都市再開発と住宅問題の実態に関する視察と資料収集	7.12.13～7.12.23	海外研修
理学部・教授	太田隆夫	アメリカ合衆国	環太平洋国際化学会議出席・講演	7.12.17～7.12.23	海外研修
理学部・教授	細矢治夫	アメリカ合衆国	環太平洋国際化学会議出席・講演	7.12.17～7.12.24	海外研修
人間文化研究科・助手	中田恭子	アメリカ合衆国	環太平洋国際化学会議出席	7.12.18～7.12.23	海外研修

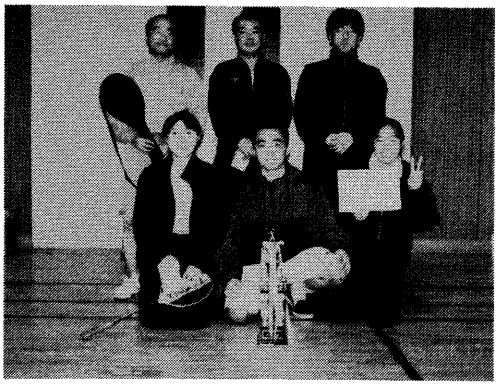
所属・職名	氏　名	渡航先国	渡　航　目　的	期　間	渡航種目
理学部・教授	藤枝修子	アメリカ合衆国	環太平洋国際化学会議出席・講演	7.12.18～ 7.12.24	海外研修
理学部・教授	福田　豊	オーストラリア共和国 スペイン	金属錯体の機能開発のための研究討論	7.12.18～ 7.12.30	海外研修
理学部・教授	益田祐一	アメリカ合衆国	環太平洋国際化学会議出席・講演	7.12.20～ 7.12.24	海外研修
生活科学部・助教授	徳井淑子	フランス共和国	フランス国立劇場資料室等における資料収集と研究交流	7.12.21～ 8. 1.12 (帰国予定)	海外研修

○ レクリェーション行事

行　事　名	実施日時	参加者数	内容・入賞者	実施場所
音　楽　鑑　賞	平成7年 12月23日	10人	題目　シューベルト：「ロザムンデ」 ベートーベン：交響曲第9番 ニ短調「合唱」	東京芸術劇場
職員バドミントン大会	平成7年 11月17日	40人	優　勝　イマイチチーム 高橋伸夫、加藤久雄、高田洋一 古賀智、和田東子、今井千恵子 準優勝　会計課Bチーム 柴田正造、竹下良久、沖山義光 峯村薫、山田輝世 第3位　会計課Aチーム 西村光範、丸山英彰、冨山弘 斉藤太一、松浦弘美	付属高等学校 体育館
映　画　鑑　賞　会	平成7年 12月11日	30人	題名「スピード」	理学部第3号館 大講義室

職員バドミントン大会　優勝チーム

準優勝チーム



第3位チーム

○健康診断

事　　項	実施日時	対　象　者	受診者数	実施場所
遠隔地勤務者健康診断	平成7年 11月1日 11月8日	理学部附属臨海実験所及び館山野外教育施設勤務者並びに志賀高原体育運動場勤務者。ただし、人間ドック受診者を除く。	5人	千葉県館山保健所 長野県中野保健所
職員定期健康診断（第2回）	平成7年 11月28日	第1回に受診できなかった者。ただし、人間ドック受診者及び遠隔地勤務者を除く。	12人	保健管理センター
VDT検診	平成7年 12月22日	VDT作業従事職員	45人	本部棟 第二会議室

日　　誌

◇諸会議

11月１日（水）　将来構想検討委員会
６日（月）　カリキュラム委員会
事務連絡会議
８日（水）　入試担当課長会議（於・東京薬科大）
９日（木）　全国理学系学長会議（～10日、於・北陸先端大学院大）
関ブロ管理事務協議会（～10日、於・信州大学）
研究協会事務説明会（於・宇都宮大学）
学生委員会
14日（火）　部局長会議
施設計画委員会
大学院問題検討特別委員会
主任会議（３学部）
15日（水）　教授会（３学部）
国立大学協会総会（～16日、於・学士会館）
16日（木）　関ブロ安全管理協議会（～17日、於・東京商船大）
17日（金）　国立大学協会事務連絡会議（於・学士会館）
21日（火）　部局長会議
22日（水）　評議会
研究科会議
27日（月）　カリキュラム委員会
公開講座委員会
28日（火）　給与実務担当者研修会（～30日、於・人事院関東事務局）
30日（木）　付属小学校長候補者、附属幼稚園長候補者選考委員会
12月１日（金）　事務連絡会議
４日（月）　入学試験委員会
人事院関東地区中堅係員研修（～８日）
５日（火）　部局長会議
施設計画委員会
主任会議（３学部）
６日（水）　教授会（３学部）
文部省人事事務研修（～14日、於・オリセン）
７日（木）　ＲＩ運営委員会
広報・就職専門委員会
11日（月）　付属小学校・幼稚園長候補者選考委員会
12日（火）　付属学校委員会
部局長会議
13日（水）　評議会
研究科会議
付属小学校教育研究委員会
14日（木）　政府調達説明会（於・医科歯科大）
国立大学図書館協議会東京地区協議会事務連絡会議（於・東大図書館）
将来構想検討委員会
18日（月）　学生委員会
20日（水）　最終予算繰越事務説明会（於・合同庁舎）
教育実習専門委員会
22日（金）　公開講座委員会
ジェンダー研究センター（仮称）設置準備委員会

◇行事等

11月１日（水）　推薦入学願書受付（文教育～８日、理・生活～７日）
８日（水）　創立 120周年記念式典・祝賀会
創立 120周年記念展示会（～10日）
10日（金）　徽音祭前夜祭
11日（土）　徽音祭
創立 120周年記念シンポジウム
理学部見学会
12日（日）　徽音祭
14日（火）　外国人留学生健康診断
15日（水）　就職ガイダンス
各学部第３年次編入学試験願書受付（～21日）
附属幼稚園願書受付

	付属小学校願書配付開始
16日（木）	附属幼稚園第１次検定
17日（金）	文学視学委員実施視察（文教育学部、人文科学研究科）
	厚生補導担当教職員協議会（～18日、於・那須・湯元）
	附属幼稚園第２次検定
	バドミントン大会
18日（土）	公開講座
21日（火）	奨学金授与式
22日（水）	マスコミガイダンス
	永年勤続者表彰式
24日（金）	付属小学校願書受付
	附属幼稚園合格発表
25日（土）	公開講座
27日（月）	献血（～28日）
29日（水）	文教育学部・生活科学部推薦入学第２次選考
	文教育・理・生活科学部第３年次編入学第１次試験
30日（木）	文教育学部推薦入学第２次選考
12月１日（金）	理学部推薦入学・帰国子女第２次選考
	付属高等学校、付属中学校願書配付開始
	附属幼稚園防災訓練
２日（土）	国際学生宿舎防災訓練
	公開講座
４日（月）	大学院問題に関する検討会
７日（木）	推薦入学、帰国子女合格発表
	理学部第３年次編入学合格発表
８日（金）	小石川寮防災訓練
11日（月）	映画（スピード）上映会
12日（火）	文教育学部３年次編入学第２次選考
	学位記（論文博士）授与式
13日（水）	毒物、劇物立入り調査（東京都）
	就職ガイダンス
14日（木）	文教育学部３年次編入学合格発表
15日（金）	学術研究総合調査（日本学術会議）
20日（水）	生活科学部３年次編入学第２次選考
	大学入試センター試験監督者説明会
22日（金）	ＶＤＴ検診
25日（月）	推薦入学合格者入学手続き（～26日）
28日（木）	御用納め